

### 30【P2】I -289

中国産マオウ属植物の研究(8). 種子発芽時の耐塩性  
御影 雅幸<sup>1</sup>, 井出 達也<sup>1</sup>, ○近藤 直子<sup>1</sup>(<sup>1</sup>金沢大薬)

【背景・目的】先に報告したように、中国では「麻黄」の栽培が行なわれているが、雑草管理などに解決すべき問題点を残している。一方、原植物のマオウ属植物には耐塩性があるとする報告があり、実際マオウ属植物は塩性地や海岸にも自生している。多くの植物は塩性地では生育しにくいことから、塩性地での「麻黄」の栽培は除草の手間を省力化できる可能性がある。近年、中国が生薬「麻黄」の輸出を禁止したことから、わが国では「麻黄」の確保が重大な問題となっている。発表者らは、麻黄の国内生産をも視野に入れてマオウ属植物の栽培研究を進めている。今回は、日本の海岸砂地でのマオウ属植物栽培の可能性を探る目的で、種子の発芽時における耐塩性を検討した結果を報告する。

【方法】実験材料として、シナマオウ *Ephedra sinica* の種子を用い、比較植物として耐塩性が強いと予想されたハツカダイコン、ホウレンソウなど、また一般的な雑草としてアカミタンポポ、レンゲソウなどの種子を用いた。種子をシャーレに入れたろ紙の上に置き、培養液として蒸留水または 50~400 mM の NaCl 水溶液をろ紙が湿る程度に加えた後、人工気象器（温度 20℃、湿度 70%、照明なし）内で培養した。発芽時の耐塩性は、発芽可能な培養液の塩濃度と発芽比（実験終了時の発芽数から算出）に基づいて判断した。

【結果・考察】シナマオウの発芽時における耐塩性は、アカミタンポポなどよりも強く、またハマダイコンと近縁なハツカダイコンなどと同程度であることが明らかになった。以上のことから、日本の海岸砂地においてマオウ属植物の粗放栽培が可能であることが実験的に証明されたと判断し、現在は海岸を模した条件下で植物株を栽培中である。